

広東語の方向動詞の補語機能

飯 田 真 紀

0. はじめに

広東語にも普通話と同様、方向動詞という、方向を表すのに用いられる一群の動詞からなるカテゴリーが存在する。そしてこれらはまた補語として動詞の後ろに置かれて機能することも可能である。一方、その他に広東語には普通話のように結果補語構造も存在する。方向補語も結果補語と同じく補語という名で呼ばれてはいるものの、広東語ではこの両者は様々な点で文法的に異なっていることが先行研究において報告されている。(具体的には1節で後述。)

本稿では1節で述べる方向補語と結果補語の文法的差異を手がかりに、2節、3節において、方向補語のタイプ別に、その文法的差異を生み出す原因となっている意味的根拠について論じたい。

以下の議論の都合上、まず本稿で呼ぶところの方向動詞というものを規定しておこう。広東語の方向動詞も普通話のように二種類ある。一つは“嚟”(普通話の“來”)と“去”の二つの動詞のみからなる、話し手に近づく動きか話し手から遠ざかる動きかを専ら表す類で、仮に“去”類(Y)と名づけておく。次に自身が動詞としてこれら“去”類を補語としてとることができ、かつまた一方では他の動詞の補語ともなることができる類を方向動詞“上”類(X)と名づけ、以下のような動詞からなるとする。

- (1) “上”類(X): 上、落(普通話の“下”に相当)、出、入(同“進”に相当)、翻(同“回”)、過、埋(「近づく」)

張 1972: 112 や李等 1995: 436 は“上”類方向動詞の範疇に、普通話に

(2)

做って“-起”(普通話の“起來”)や“-開”を含めている。しかし本稿では上述の根拠に基づき、Matthews&Yip1994:145と同様、これらを“上”類から除外した。

“上”類と“去”類の二類は、(2)のようにXYという語順で組み合わせられて、複合方向動詞や複合方向補語として機能する点もまた普通話に同じである。

(2) “上去”類：上去、上嚟、落去、落嚟、出去、出嚟、入去、入嚟、翻去、翻嚟、過去、過嚟、埋去、埋嚟

1. 方向補語と結果補語

本節ではまず、方向補語と結果補語とで異なった様相を呈する文法現象を具体的に見ていくことにする。

1.1. 可能補語否定形

広東語にも普通話と同じように可能補語形が存在する。肯定形の場合は動詞(V)と補語(C、結果補語も方向補語も含めて呼ぶ)の間に“得”を、否定形の場合は“唔”という普通話の“不”に相当する否定詞を挿入して作られる。

肯定形…V得C 否定形…V唔C

このうち否定形式に関してはYue1972で指摘があるように一部の補語に関して制約がある。そこで本稿では専ら否定形のみを問題にする。²⁾

それではまず、補語が結果補語(R)の場合の可能補語否定形(V唔R)の例をいくつか挙げてみよう。

(3) 我望住初升嘅太陽，睜開瞓唔醒嘅睡眠話，…「未!」(小男下169)

着 的 睡不 的 說 没有

(私は出たばかりの太陽を眺め、目の覚めない目を開けて言った。

「まだ!」)

- (4) 又係 Q 太郎個死仔嘈醒我, 佢話尋晚瞓唔着, (小男下 25)

是 CL 家夥 吵 他說昨晚睡不着 (CL…量詞)

(またもや Q 太郎のやつがうるさかったせいで私は目が覚めた。彼は昨日の夜眠れなかったと言った。)

- (5) 三分鐘講唔晒喎。呢個禮拜我又唔得閒, 不如下個禮拜啦! (小男下 100)

說不完 SP 這 沒空 SP (SP…文末助詞)

(三分では話さきれないよ。今週は私は忙しいし、何なら来週にしましょう。)

次に動詞 (V) + 方向補語 “去” 類 (Y) の場合はどうかというと、Yue1972 の指摘を裏付けるように、V 唔 Y という形は末尾に挙げた 19 のコーパスには次のような慣用的用法を除いては一例も見当たらなかった。

- (6) “過唔去” (しっくりいかない)
- (7) “死唔去” (死なない)
- (8) “過意唔去” (すまない)
- (9) “~唔嚟” [~できない]

(例) “做唔嚟” ((仕事) が) できない

また、次の (10) (12) は、普通話の方向補語に関する研究書である劉 1998 から採った、方向補語 “去” 類を用いた可能補語否定形の例文であるが、これを広東語に直訳すると不適格となる。((11) (13))

- (10) 他渾身乏力, 腿軟得連樓梯都上不去了。(劉 1998 : 68)

(彼は全身脱力して、足がくたくたで階段も上れなくなった。)

- (11) *佢成身冇力, 腳軟到連樓梯都上唔去嘍。

他 沒有 腿 得 不去了₂

- (12) 可惜, 他再也回不來了。(劉 1998 : 52)

(残念なことに彼はもう帰ってこれなくなった。)

- (13) *可惜, 佢再翻唔嚟喇。

他 回不來了₂

一方、飯田 1998b でも既に述べたように、同じ方向補語でも “上” 類 (X)

(4)

が補語の場合はV 唔 X という形は、結果補語からなるV 唔 R と同様頻繁に用いられる。コーパスから拾った例をいくつか挙げてみよう。

(14) 我當時激到個喉嚨好似塞咗嚙膠响裏面噉, 啖氣吞極都吞唔落。(小男

下 69) 氣得 CL 好像 了₁ CL 在 那樣 CL 怎麼也 不下

(私はその時あまりにも怒ってしまい、のどがまるで何かが中につっかかったような感じで、息をいくら飲み込もうとしても飲み込めなかった。)

(15) 佢嚇到連車門嘅鎖匙窿都插唔入。(笑 103)

他 得 的 孔 不進

(彼は驚きのあまり車のドアの鍵も差し込めなかった。)

(16) 「你講唔出原因, 我唔做嘞, 街口冇落。」(小男下 201)

不 不 了₂ 下(車)

(あなたが原因を言えないのなら、私はやらない。次の角で降ろしてください。)

(17) 我覺得自己同阿 Ann 都變咗好多, 再搵唔翻以前嘅感覺。(小男下 108)

跟 了₁ 很 找不回 的

(私は自分もアンも変わってしまって、もう以前の感覚が取り戻せないように思った。)³⁾

1.2. 接辞と目的語の位置

1.1. では可能補語否定形に関して方向補語“去”類が結果補語と異なることを示したが、この両者の文法面におけるもう一つの大きな相違点としては、張 1972 や李等 1995 など多くの先行研究で指摘されているように、接尾辞と目的語の位置の違いが挙げられる。

広東語には完了アスペクトマーカの“咗”をはじめ、他にも様々な意味をもつ述語接尾辞 (suf.) がある。これらは結果補語構造 (V R) の場合には V R 全体の後ろに置かれ (V R + suf.)、V R の間に割って入ることはできない (*V + suf. + R)。

(18) 食完 咗 飯 (*食咗完) (張 1972 : 108)

吃 了₁

(ご飯を食べ終わった)

ところが、方向補語“去”類の場合は、逆にVとYの間に割って入るほかはなく(V+suf.+Y)、*VY+suf. という語順は許されない。

(19) 阿嬤 翻 咗 嚟。 (*翻嚟咗) (Matthews&Yip1994 : 146)

奶奶 回 了₁ 來

(おばあさんは帰って来た。)

次に、場所目的語以外の一般の目的語(O)の位置も接尾辞の場合と同様、結果補語構造全体の後ろに来てVR+Oとなり、*V+O+Rという語順は許されない。

(20) 飲醉 酒 *飲酒醉 (張 1972 : 108)

喝 醉

(酒に酔っ払う)

ところが、方向補語“去”類を補語にする構造については、この場合もやはり目的語(O)はVとYの間に置かれ(V+O+Y)、*VY+Oという語順は同じ意味を表すものとしては成立しない。⁴⁾

(21) 我 拎 啲 嚟。 (私はそれを持って来る。) (張 1972 : 118)

拿 cl 東西 來

(22) *我 拎 嚟 啲。

2. 可能補語否定形における方向補語

2.1. 結果補語、方向補語“上”類と方向補語“去”類

1節で述べてきたようにV唔Yという可能補語否定形が取れないことについて、Yue1972、1988、1995、1996では動詞と補語の間に否定詞を入れる否定形(V唔C)自体が広東語固有の形式ではなくよそから借用された形式であるため、方向補語構造には使えないという制限があることが述べられてい

(6)

る。しかしなぜ方向補語構造に限って制限をもつのかという理由についてはふれていない。また、飯田 1998b では同じ方向補語でも“上”類はV 唔C形がとれるのに対し、“去”類ではV 唔C形がとれないという、方向補語の中でも異なりがあるという現象は指摘していながらも、その理由について方向補語の持つ意味の側面からの議論が全くなされていない。

そこでここでは 1.1. の観察から窺われた「結果補語&方向補語“上”類V S 方向補語“去”類」という文法的対立現象を手がかりに、方向補語“上”類と“去”類の可能補語構造における意味機能の差を考えてみたい。

言うまでもなく、可能補語否定形というのは動詞+補語という組み合わせのうち、補語の表す結果部分の不可能性に焦点を当てたものである。

(23) 因爲佢着咗避彈衣, 所以打極都打唔死佢。

他穿了₁ 怎麼也 他

(彼は防弾チョッキを着ているのでいくら撃っても撃ち殺せない。)

これは結果補語を用いたV 唔Rの例であるが、“打”「撃つ」という動作はできるが、彼が“死”「死ぬ」という結果をもたらすことまではできないということである。“V極”というのは「いくら～しても」という意味を表す。)

次に方向補語“上”類を使ったV 唔Xの例を見よう。

(24) 張床太過大, 搬極都搬唔入。

CL 太 怎麼也

(そのベッドは大きすぎてどうやっても運び入れられない。)

(23)と同様に(24)も、“搬”「運ぶ」という動作については否定されておらず、ベッドがどこかに“入”「入る」という結果が得られないことが否定されている。このように結果補語(23)の例も方向補語“上”類(24)の例も、事態として<動作>と<結果>という二つの局面を設定している。

それでは次に 1.1 で可能補語否定形が作れないとされた“去”類方向補語について考えてみよう。“去”類方向補語の意味はそもそも話し手との関連でその動作が離れるもの(“去”)か向かってくるもの(“嚙”)なのかという直示性(deixis)を述べ立てるのであり結果を表すのではない。V Y構造が表すの

は、VRやVXが表すような動作と結果という二項対立的事態ではなく、結果性をもたない単一の事態であり、VとYとは時間的には同時進行のものである。

たとえば“搬去”「運んで行く」と言った場合、“搬”「運ぶ」時点で既に“去”「行き」始めている。つまり“搬”「運ぶ」と“去”「行く」とは切り離せない一つの事態なのである。このことは、方向補語“上”類を使った“搬唔入”「運び入れられない」が、“搬”「運ぶ」と“唔入”「入らない」とを別々の二つの事態として認識していることと比べてみればその差異は明らかである。

方向補語“上”類からなる動補構造VXのように動作と結果という二つの事態が切り離して考えられるものは、後の方の結果部分のみの不成立を言うことはできようが、“去”類補語（「行く・来る」）がこのようにVと切り離して考えられない以上、それを結果として言い立てることは意味的に不可能である。そこで結果の実現不可能を述べる構文である可能補語形は成立しない。

(25) *張床太過大, 搬唔去。

(そのベッドは大きすぎて運んで行けない)

さらに、結果補語と方向補語“上”類の事態の把握の仕方が共通しており、方向補語“去”類のみが異なっていることを裏付けるもう一つの文法的現象として、可能補語否定形に目的語が入ったVO唔Cという形式の例を挙げておこう。

広東語では目的語(O)の位置については、V唔COという普通話と同じ語順のほかに、VO唔CというOを間に入れた語順もある。Oに対する働きかけである動作は実現可能だが、その結果のCの不可能性に言及しているという点を具現するかのように、VO唔C語順はCが結果補語であっても方向補語“上”類であっても適用できる。

(26) 因爲佢着咗避彈衣, 所以打佢唔死。

(彼は防弾チョッキを着ているので、いくら撃っても彼を撃ち殺せない。)

(8)

(27) 張床太過大, 搬佢唔入。

(そのベッドは大きすぎて、それを運び入れられない。)

しかし、“去”類が補語の場合にはこの形式は成立しない。

(28) *張床太過大, 搬佢唔去。

(そのベッドは大きすぎて、それを運んで行けない)

2.2. 普通話との差

以上、“去”類方向補語の意味的性質から、それを補語とした可能補語形V唔Yが広東語では成立しないことを説明してきた。ところで普通話については次のように“去”類補語を補語にした可能補語否定形が存在する。

(10) 他渾身乏力, 腿軟得連樓梯都上不去了。(劉 1998: 68)

(12) 可惜, 他再也回不來了。(劉 1998: 52)

范 1963 による書面資料に基づいた研究によれば、実際に現れたV不Yの例は全てこのようにVが“上”類方向動詞であるものであったという。

一方広東語では“上”類方向動詞がVとなっているものでも可能補語否定形にできないという事実は、1.1. において既に述べた通りであり、例 (11) (13) は非文である。

(11) *佢成身有力, 腳軟到連樓梯都上唔去嘍。

(13) *可惜, 佢再翻唔嚟喇。

普通話においても意味的に考えれば、“去”類方向補語が結果を表すものではないことが予測される。普通話のV不Yの実例が、Vが“上”類方向動詞に限られるという范 1963 の観察からも、やはり普通話でも“去”類方向補語が可能補語否定形の形成に制約を持つことを示している。

それではVが“上”類方向動詞である場合の、普通話と広東語における可能補語否定形の成立に関する、例文 (10) ~ (13) に現れたような差は、いったい何に起因するのであろうか。それは他ならぬ“上”類方向動詞自体の動詞としての独立性の差に原因があると考えられる。

広東語の“上”類方向動詞は次のように自由に独立した動詞として使うこ

とができる。

(29) 你落唔落呀?

下不 SP

(下に行きますか?)

(30) 你出唔出呀? (出ますか?)

(31) 你過唔過呀? ((向こう側へ) 行きますか?)

一方、普通話では方向を表す意味の場合には、方向動詞を一般の動詞のようには使いにくい。

(32) *你出不出? (出ますか?)

このように“上”類方向動詞の自立性が広東語では高く、他の動詞とほとんど変わらないのに対し、普通話のそれは低い。したがって、“上”類方向動詞自身がVである場合に、普通話では可能補語の否定形V不Cという型を構成するためには“去”や“來”が必要とされるのであろう。一方、広東語ではその必要はなく、“上”類方向動詞は動詞として自立性が高いので他の結果補語を後ろに取ることができる。例えばよく使われるのは“倒”(達成を表す結果補語の一種)である。

(33) 既然主入口入唔倒, 開個特別通道過佢啦! (好: 153)

進不到 CL 給他 SP

(表の入り口が入れないのなら特別の通路を開けてやれ。)

(34) 如果我嘅行為令到佢哋永遠落唔倒香港, 我會好痛苦。(末: 97)

的 使得他們 下不到

(もし私の行為が彼らを永遠に香港に来られなくしている原因なのだとしたらとてもつらい。)

3. 方向補語“上去”類

ここまで方向補語“上”類と“去”類については比較しながら議論してきたが、この二つが組み合わさった方向補語“上去”類(XY)については言及

(10)

してこなかった。それでは次にこのタイプの補語の可能補語否定形について述べたい。

Yue1988では方向補語“上去”類を用いたV 唔XYという可能補語否定形は不成立とされている。私の調べた口語資料では実際にはこの形は若干数現れたが、V 唔Xに比べると非常に出現頻度が低く、これもやはり基本的には否定形が非常に作りにくいと言える。

その最大の理由はもし“上”類補語のみを使ってV 唔Xの形式で同じことが言えるならば、わざわざ“上去”類を用いたV 唔XYの形にして「行く・来る」(Y)にまで言及する必要がないからであると考えられる。

可能補語形(V得/唔C)というものは原形(VC)に対してみれば有標形式(marked form)である。有標形は通常無標形よりも機能や意味が制限を受けやすい。可能補語形はVCという原形を元に構成されるのであるが、ここでは結果(C)の実現の可能・不可能の伝達が主目的となっている。無標形式である原形で存在する形が有標形である可能補語形でも全て同様に制限なく使われるとは限らず、原形では頻出するVXYという複合方向補語構造が可能補語否定形をとることが現実としてはほとんどないという事実は、可能補語形が有標形であるがゆえの制約であると考えられる。

なお、“上去”類が可能補語否定形をほとんど構成しないことについてはすぐ上で、“上”類を用いて表現されることに“去”類をさらに付けるのは可能補語形の第一義的な目的からは余剰的であるからと、ごく簡単にしか説明しなかったが、個々の具体例を見てみると、実際はそれほど単純でもない。例えば次の(35)の例のように“落去”という“上去”類方向補語を用いた可能補語否定形がコーパスに見られた。

(35) 林太講唔落去, 因為, 佢已經開始喊。(小下: 47)

太太 不下 她 哭

(林さんは話し続けられなかった。なぜなら彼女は既に泣き始めていたから。)

この“落去”という補語を用いた可能補語否定形は他にも2、3例散見し

た。これはこの補語形式が“落”と“去”の意味の和ではなく、この形式で一まとまりとして「～し続ける」という、“落”とは区別された独自の結果的意味を発展させているがために、“V 唔落”（例文(14)を参照）とは別の事態を表す必要から、“V 唔落去”という可能補語否定形が成立する契機を有しているのだと考えられよう。

このように“上去”類方向補語の可能補語否定形の成立・不成立については、それぞれ個別の例について、構成要素である“上”類方向補語のもつ意味が関わってくる。したがって類として一概に可能補語否定形が作られないとは断定できない。

また、飯田 1998a、1998b では、方向補語“上去”類はV 唔倒XY、方向補語“去”類ではV 唔倒Yという形を取って可能否定が表されると述べている。しかし実際にはこれらの形はコーパスにはほとんど現れず（文末に挙げるコーパスの中でV 唔倒XYが3例見つかったのみ）、V 唔倒Yに至っては一例も見つからないことが見落とされている。V 唔倒YやV 唔倒XYはその形式が示すように“倒”が既に結果部分を担う補語（C）として存在しており、したがって残りのXYやYは余剰的（redundant）である。上の議論の繰り返しになるが、可能補語否定形V 唔Cでは何か一つ結果（C）が実現できないことを言うのが主目的なのであり、余分な成分を含んだV 唔倒YやV 唔倒XYは冗長な言い回しになるため、実際のコーパスでほとんど現れないのであろう。

4. おわりに

本稿では広東語の方向動詞の各類の補語としての文法的振る舞いの違いが、それらの意味的差異に起因するものであることを論じた。また、広東語では方向動詞“上”類の自立性が相対的に高いことから、普通話以上に方向補語“上”類と“去”類の意味的差異が可能補語否定形という文法形式において如実に反映されることがうかがわれた。

(12)

注

- 1) 李等 1995:436、源 1995 などはさらに“翻上去”のような方向動詞が三つ用いられる複合形式の存在から、方向補語を二種類以上に分けているが、本稿の議論には関係がないのでこのことには触れない。
- 2) 否定形V唔Cのみに制約が見られ、肯定形V得Cについて制約があると言われていないのは、肯定形に含まれる“得”の意味が普通話よりも広く、ある場合にはV得C形式で許可の意味も表せるからである(張 1972:120)。否定形V唔Cではそのような意味は生じ得ない。
- 3) このような“翻”は元の方向義から派生して、「取り戻す、回復する」といった派生義を表すようになっていたので、張 1972:123 では「回復補語」というように別の分類を立てている。しかし、このことも方向補語“上”類は結果的意味を生じさせ易いということを表しており、後で議論するように結果補語との意味的平行性を示唆している。
- 4) 張 1972:137 がいうように、V+Y+Oという語順はVYがOを修飾する構造と見れば成立可能である。すなわち(22)の例文について言えば「私が持って来たもの」と解釈すれば文法的に正しい。

<用例出典> (#が付いているものは 1.1. で言及した 19 のコーパスを指す。)

- # (阿)「阿全正傳①」(第三版), 林海峯, 友禾製作事務所有限公司 (1990)
- # (邊)「邊緣錯愛」(第六版), 梁望峯, 博益出版集團有限公司 (1996)
- # (純)「純屬反叛」(第六版), 梁望峯, 博益出版集團有限公司 (1997)
- # (都)「都市情懷③」(第三版), 蔡齡齡, 友禾製作事務所有限公司 (1989)
- # (好)「好學武林」(第四版) 畢華流, 博益出版集團有限公司 (1994)
- # (可)「可愛壞蛋」(第四版), 畢華流, 博益出版集團有限公司 (1994)
- # (冒)「冒險寶典」(第三版), 畢華流, 博益出版集團有限公司 (1995)
- # (美)「美夢成真」(第十一版), 畢華流, 博益出版集團有限公司 (1994)
- # (末)「末世紀風情 2」(第二版), 阿紀, 友禾製作事務所有限公司 (1990)
- # (前)「前綫體驗」(第五版), 畢華流, 博益出版集團有限公司 (1995)
- # (軟)「軟硬天師教英文」, 軟硬天師, 友禾製作事務所有限公司 (?)
(軟鬼)「軟硬天師講鬼故 2」(第六版), 軟硬天師, 友禾製作事務所有限公司 (1989)
- # (上)「上班一族 練精學懶講座 Part2」, 阿寬, 友禾製作事務所有限公司 (1989)
- # (係)「係咩? 唔係囉!」, 謝芷靈, 香港周刊出版社 (1990)
(香 1)「香港仔日記 1」, 黃靄, 文林社出版社 (1998)
- # (笑)「笑中憂鬱」(第五版), 梁望峯, 博益出版集團有限公司 (1995)

- # (校)「校方錢人」(第七版), 梁望峯, 博益出版集團有限公司 (1995)
 - # (小上)「小男人周記〔上集〕」(第二版), 阿寬, 皇冠出版社 (1996)
 - # (小下)「小男人周記〔下集〕」(第二版), 阿寬, 皇冠出版社 (1996)
 - # (夜)「夜半無人・愛的宣言」(第十二版), 畢華流, 博益出版集團有限公司 (1994)
 - # (諸)「諸事奇案」(第八版), 畢華流, 博益出版集團有限公司 (1994)
- * 出典を明記していない例文は自分で作成したものにインフォーマントのチェックを受けたものである。インフォーマントは香港人男性 Andy Ho さん (25 歳)。

<参考文献>

- 范繼淹 1963. 「動詞和趨向性後置成分的結構分析」, 『中國語文』 2.
- 飯田真紀 1998a. 「香港広東語の可能補語構造における“倒”」, 『中国語学』 245 号.
- 飯田真紀 1998b. 「香港広東語の可能補語否定形」, 『中国言語文化論叢』 第 2 集.
- 李新魁, 黃家教, 施其生, 麥耘, 陳定方 1995. 『廣州方言研究』. 廣州: 廣東人民出版社
- 劉月華主編 1998. 『趨向補語通釋』. 北京: 北京語言文化大學出版社
- Matthews, S. and Yip, V. 1994. *Cantonese: A COMPREHENSIVE GRAMMAR*. London and New York: Routledge.
- 源國偉 1995. 「廣州話的趨向動詞」, 『廣州話研究與教學 (第二輯)』, p. 41-51.
- Yue-Hashimoto, Anne O. (余靄芹) 1972. *Studies in Yue dialects, vol. 1: The Phonology of Cantonese*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 1988. 「漢語方言語法的比較研究」, 『中央研究院歷史語言研究所集刊』 LIX: 1,23-41
- 1995. 「粵語研究的當前課題」, *Journal of Chinese Linguistics* vol.23, n.1,1-41
- 1996. An Aspect of Cantonese Grammar in Historical Perspective, *Proceedings of the First International Symposium on Synchronic and Diachronic Perspectives on the Grammar of Sinitic Languages*. Melbourne 96.7
- 張洪年 1972. 『香港粵語語法的研究』. 香港: 香港中文大學